ISSN-1880-4799 信州短期大学紀要, 第 20 巻, 67-70（2009.3）

教育事例

ボランテイア体験学習の教育的効果と課題

関口昌利（信州短期大学）

The Consideration about the Educational Effect and Problem of the Volunteer Experience Learning

Masatoshi Sekiguchi (Shinsyu Junior College)

***Abstract*:** The purpose of this study is to consider an effect and the problem of the volunteer experience learning. Volunteer activity of the students is one society experience learning. I analyze the present conditions of the student volunteer and the ideal method of the volunteer lecture.

***Key words*:** a volunteer lecture, student volunteer activity, a student volunteer center, local interchange, contribution to society, an experience with the meaning for the life of the student.

1. はじめに

平成19年度の信州短期大学生のボランティア活動参加状況は、平成19年度自己点検・評価報告書にて報告されているとおり、参加延べ人数は 520 名、活動数は 112 件であった[1)]。平成15年度のボランティア講座開講以来、毎年履修者数は増加しているものの、学生自身が多くのことを学び成長できたのか、地域に学生ボランティアは定着しているのかという点について、十分に分析する機会はなかった。ボランティア情報提供団体、事業所との連携を一層密接なものにして、活動後の学生の自己評価を重要視し、ボランティア講座の意義をあらためて認識し直さなければならない。

本稿では、学生ボランティアの現状をふまえ、ボランティア体験学習の教育的効果とこれからの課題について考察する。

2. 平成19年度のボランティア講座

（1）科目名称

「ボランティア」。学年の前期・後期によりⅠ～Ⅳに分かれる。 集中講義形式で、1単位科目。

（2）授業目的

様々なボランティア活動に対する理解を深め、ボランティア活動の社会的意義を考える。そして、地域に根ざした各種行事や奉仕、支援を必要としている場面に、ボランティアとして主体的に参加し、各自のボランティア意識の高揚を図ること。

（3）単位取得

学外からの募集情報を、履修学生が選び、学事課へ申し込み手続きをした後、取りまとめを担当教員が行い、主催者側と打ち合わせの上参加させる。

活動終了後、内容、学び、反省点、提案事項等を所定のレポートとして提出し、3 回以上の活動に参加することを要件として、1単位を取得。

【回数の算定の基準（活動時間の目安）】

4 時間未満 … 0.5 回

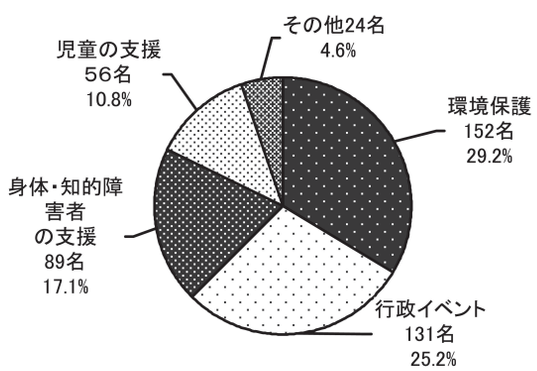
※但し、夕方18時以降夜間帯にかかる場合…1.0 回

4 時間以上8時間未満 … 1.0 回

8 時間以上 … 1.5 回

（4）活動内容 （延べ参加者 520 名中）

【活動分野別内訳】



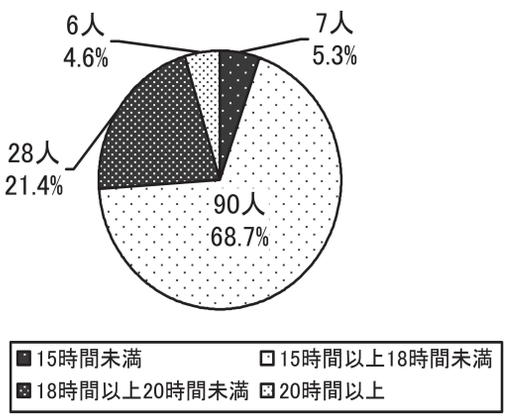
18 時以降の夜間帯活動として、「高齢者・障害者施設

等の夏祭り、盆踊り大会」に 39 名参加。

4 時間未満の活動としては、「道路のゴミ拾い」「ボランティアセンター主催の古切手整理」「冬季の雪かき」がある。ゴミ拾いは、毎月 1 回第 3 土曜日の午前中に、ボランテイアサークルの呼びかけにより定例活動として実施し、延べ 92 名が参加。他に、夏期休業中に地域のゴミ拾い活動にも自主的に参加した学生が 18 名いた。冬季の雪かきボランティアは、短大キャンパス構内 2 件、学校周辺の歩道 8 件、地元自治会近隣道路4件であった。

8 時間以上の活動とは、行政主催のイベント等で、早朝の会場準備から行事終了後の後片付けまでを行うものである。小諸市「こもろ地球人まつり」（6 月 10 日）に 6 名参加、佐久市「国際交流フェステイバル」（11 月 18 日）に 15 名が参加。

【 単位取得にかかる 1 人当りの活動時間 】



最少所要時間は 10 時間、 最多は 27 時間であった。

平成 19 年度「ボランティア」科目の単位取得者 131 名（前期・後期ともに履修・単位取得した学生含む）の結果。主催者側実施要綱と報告レポートより算出。

3. 県内他大学のボランティア活動推進の状況

（1）ボランティアセンターの設置

近年の大学・短大のひとつのテーマとして、「地域に開かれた大学づくり、地域交流、地域貢献」があげられる。平成7年の阪神淡路大震災をきっかけに、義務教育も含めて、学校教育現場におけるボランテイア活動は活発になり、大学ボランティアセンターが全国各地に設置・運営される動きも広まった。その組織的な位置づけや活動内容は多岐にわたっているが、大学ボランティアセンターの意義として、次の3点が挙げられる。[2)]

①大学生への教育的意義

第一に、共に生きる社会・地域づくりへの体験的学びの場としてのボランティア活動を学生に提供し支援することで、問題発見・問題解決能力や、社会の構成員としての自覚や責任意識の獲得を促すという役割がある。

②大学の社会貢献を促す意義

大学の教育・研究活動を社会や地域の課題解決と結びつけることによって、大学の社会貢献的役割を強化していく意義は大きい。

③大学生ならではの活動を普及する意義

例えば、児童にとって年齢が近い学生は親しみやすい存在であることから、児童の健全な遊びや福祉学習等のサポート役として期待される。また、時間的余裕が比較的多いことから、継続した活動が可能になる。

長野県内の四年制大学・短期大学をみると、長野大学のボランティアセンターが特徴的である。『長野大学ボランティアセンターふらっと』は、平成 11 年 3 月に、ボランティア活動に関心のある学生有志によって設立され、同年 10 月に NPO 法人格を取得して学生自身が運営も行っている団体である。運営スタッフと学生ボランティア、利用する様々な人々（高齢者、児童、障害者、地域住民）が同じ位置で肩を並べ（フラット）、そして「ふらっ」と気軽に利用してもらうことを目的としている。全国の多くの大学・短大ボランティアセンターが、大学組織推進型で、大学の設立理念に深く結びついて設置されるケースであることと比較すると、学生中心型で、学生と地域のつながりを大切にして運営されている。「ふらっと」の社会福祉学部社会福祉学科山本高之によると、同学部内だけでも、30～40 のボランティアサークルが存在しており、そのとりまとめをする窓口になり、視野を広げるための勉強会も主催しているという。

（2）学生ボランティア情報交換会

平成 20 年 6 月 1 日に、長野県社会福祉協議会ボランティア地域活動センターの呼びかけにより、第 1 回長野県学生ボランティア情報交換会が、塩尻市総合文化センターにおいて開催された。

第1回目の交換会には、信州大学、諏訪東京理科大学、長野大学、松本大学、清泉女学院短期大学そして本学の県内6校が参加した。その後、2ヶ月に1回のペースで定期的に開催されており、信州豊南短期大学が第2回目から加わった。

長野県社会福祉協議会の菅原勉主事は、「情報交換会のねらいは、第一にボランティア活動を行っている

学生が顔を合わせる機会をつくること。次に、日頃の活動について情報交換を行い、直面している課題について共に話し合うこと。そして、学校・学生同士の交流を促進し、学校の枠を超えた協働の可能性を探ることである。」と、第1回目の会合の冒頭でその趣旨を述べた。

情報交換会で毎回とりあげられ意見交換されている課題に、「登録者数そのものが少ない、あるいは登録者は多くても、実働数が少ないので、この状況をどうしたら改善できるか」というテーマがある。これに対して挙げられた幾つかの意見を以下に紹介する。

- ○ ボランティア・コーデイネーターが、活動先の情報を多く有していて、その活動の意味を学生に伝えることによりリピーターは増えていく。また事前に情報を提供しておくことが、学生のモチベーションを高めるためにも必要だと思う。
- ○ ボランティア報告会を開くことにより、良かったこと、悪かったこと、失敗したこと、ためになったことが、経験した学生から他の学生に伝わり、活動に意欲が湧く学生も多くなるのではないか。
- ○ どんなことをやるかがわからないと不安が多くて自信がもてない。
- ○ 自分が意味あると思うことには参加しようと考えるし、活動を通した学びができるなら関わっていく学生は増えるので、根気が必要だ。

「ボランティア・コーデイネーターの役割」、「ボランティア報告会」、「意味のあるボランティア活動・体験」を 3つのキーワードとして、今後の情報交換会と授業の発展に結びつけていきたいと考える。

4. ボランティア体験学習の教育的効果

学生たちのボランティア活動は、ひとつの社会体験学習と捉えることができる。ボランティア活動における学びは、社会貢献という目的にとどまらない多様な学びがそこに存在する。常盤大学コミュニテイ振興学部池田幸也教授は [3]「学生たちにとってのボランティア活動の意義は、体験を通して自分のあり方と世の中を学んでいくことであり、さらに自己のあり方と世の中をいかに統合するかである。このような教育的な意義を大学の教育理念に照らし、具体的なカリキュラムのなかで明確に位置づけていくことが大切である。」と学生ボランティアの意義について述べている。学生に対して、最初から地域貢献や地域住民との交流を要求することは困難である。ボランティア科目の中で、ボランテイアの教育的意義を、学生に意識付けられるように、具体的なカリキュラムを検討する必要がある。ボランティアの授業のあり方について、池田教授は、「大学で学ぶ知識や技術が、いかに世の中で有用であり役立つかのかを、ボランティア活動を通して確かめることのできるきっかけとなる授業があることが望ましい。またボランティアという言葉からではなく、学生たちの身近な興味や関心事を生かしたボランティア活動へとつなげるコーデイネーションも大切になってくる。将来の進路や専門分野、理系か文系かを問わず、ボランティア活動そのものが、学生自身にとって『意味のある体験』の場となるのは、そこでは学生たちが、さまざまな経験や思い、考えをもった人たちと出会うことができるからである。」と解説する。

この「意味のある体験」は、友人や家族そして教員などの身近に関わっている人々以外の存在との出会いなしでは成り立たない。自分の生き方やあり方に大きな影響を与える学外の人々との出会いを提供する場として、ボランティア活動は大きな可能性をもっている。これが、社会体験学習としてのボランティア活動がもたらす、最大の教育的効果であると考える。

日本ボランティア学習協会理事の学習院大学長沼豊教授は[4]、ボランティア活動の学びについて次のように述べる。「一つは他者との出会い。さまざまな他者と出会っていろいろな立場の人たちがいることを感じ、理解します。もう一つは、社会と自分を結んでいく中で、環境や人権や国際教育などの社会的な課題に気づく学びです。三つ目は自己との出会いです。自分の有り様とか、自分の生き方とか、社会の中に生きる自分であるとか、自分に跳ね返ってくるものを検証する営みが学びとしてあるのです。」と。

学生の報告レポートに目を通すと、「活動を通してさまざまな人々とふれあえたこと」という感想が最も多い。短大でのキャンパスライフで、同世代の友人とほとんどの時間を過ごす学生にとっては、ボランティア活動における出会いと交流は、立場の違う他者の存在を知る絶好の機会であり、貴重な体験となる。そして、ボランティアを通して相手と過ごす時間、他者と共有できる目的意識、それによって生まれる信頼関係は、決してアルバイトでは得られないものであり、ボランテイアならではの魅力だといえる。

5. ボランティア科目の今後の課題

(1)教職員の資質

先に紹介した学生ボランティア情報交換会における他大学の学生の意見の中に、ボランティア・コーディネーターが、活動先の情報を多く有し、活動の意味を学生に伝えることが重要だと指摘するものがあった。本学には、ボランティアセンターが存在しないので、学外からの情報は、科目担当の教員が窓口になっているが、現状では募集情報を掲示して単に参加者を募り、申し込みがあった場合のみ、主催者に人数・名簿を伝えるだけの作業に終始してしまっている。集中講義形式なので、学生とボランティア活動との橋渡し役が十分に機能しない上に、初めてボランティアをする学生の心構えや知識をしっかりと指導できていないという科目としての根本的な問題がある。学生のボランティア活動推進を通して、学生だけでなく、教員も多くのことを学ぶという相乗効果を再認識しなければならないと反省している。社会福祉協議会等のボランティア・コーディネーターをゲストティーチャーとして招くなど、学内外の専門の先生・関係者とどのように連携を築いていくかが今後の課題である。

(2)学生の活動ニーズの発掘

本稿冒頭で示したように、19年度は 112 件の活動に参加したが、外部からの募集依頼はこの倍近くに上っている。「学生からの活動希望がなかなか寄せられない」、「学生の活動ニーズが不足している」と教員サイドでは悩んでいた。しかし、自然に集まるのを待つことの限界は明白である。本学学生の中には、趣味のサークル活動やスポーツに打ち込んで、人間的成長を実現している者も多いが、その一方でボランティア活動の機会を欲していながら、その機会を見過ごしている学生も少なくないと思われる。そのニーズに対して、適切に情報が提供されていない現状を捉えて、学生のニーズを積極的に発掘し、育成していく方法を、科目のプログラムとして工夫しなければならないと考える。この点についても、学内外の関係者との連携と調節が今後一層必要になる。

(3)科目自体の位置づけ

本学の「ボランティア」科目は、ボランティア体験を実践することを主目的としている。ボランティアについて学ぶという色彩は希薄で、現在のところ学生の活動体験のみで構成されている。全国的に見るとボランティア関連科目を開講している学校は、大学で256校、(49%)、短大で99校(34%)となっている。単位を取得できる活動体験の時間数について状況は様々で、平均活動時間が大学で 37.2 時間、短大で 26.0 時間というデータがある[5]。本学の 3.0 回以上の活動参加という要件では、10時間足らずで1単位を取得できてしまう場合もありうる。この時間数だけで、学生の学びの中身までは評価できないが、肝心なことは、時間や活動数のみにこだわらず、地域貢献や地域交流といった目的だけに焦点を当て過ぎないで、学生にとって豊かな社会体験学習の機会をつくることができているかどうかを見極めることであろう。

6. まとめ

学生ボランティア情報交換会に参加し、他大学の学生・先生方と意見交換できる機会を得たことは、筆者自身にとって有意義であった。学生からの提案を本学ボランティア科目にも反映したい。自発性を旨とするボランティア活動を単位化するのであれば、学外からの情報収集・活動メニューの選択や学生の巡回指導などについて一層の教員の関与が求められると考える。また、今年度特にボランティアに参加する学生が少ないという現状であるが、情報そのものが学生に伝わっていないと思われるので、広報PRの努力と工夫、事前講義とオリエンテーションの充実も早急に検討しなければいけない。さらに教育的効果を図るため、レポート提出にとどまらず、「体験報告会」を開催し、学生のモチベーションを維持しながら、ボランティア活動を継続できるような支援も必要である。学内外の関係者、諸先生方と連携をとり、学生の学びのために努力をしていきたい。

[投稿 2008 年11月 18 日、受理 2008 年 12 月 16 日]

[参考文献]

(1) 信州短期大学.「自己点検・評価報告書(平成19年度)」. 平成20年7月10日発行.
(2) 上野谷加代子:「大学ボランテイアセンターガイド」. 全国社会福祉協議会. p1. 2006年
(3) 池田幸也:「大学生のボランテイア活動推進がもたらす教育的効果と今後への期待」. ボランテイア情報. 371号, p4. 2008年
(4) 長沼豊:「大学ボランテイアセンターガイド」. 全国社会福祉協議会. p8. 2006年
(5) 長沼豊:「大学・短大におけるボランテイア関連科目についての実態調査報告書」. 学習院大学教職課程長沼研究室. pp11－26. 2007年